

今月の技術対策 (畑作編)

留萌農業改良普及センター

TEL : 0164-62-1779 FAX : 62-2474

E-mail: rumoi.nakanoukai1@pref.hokkaido.lg.jp


 水稲・園芸編も
HPで公開中！

6月以降の好天で作物の生育が早まり、秋まき小麦は4日早く成熟期となりました。豆類の生育も順調ですが、今後の高温や7月中旬以降の曇天降雨の影響で病害虫が多発する可能性があります。収穫後のほ場管理や防除に向けた予察は、早めに作業をすすめていきましょう。

【麦類】

1 収穫後のほ場管理

(1) 麦稈の処理

- ① 収穫後、麦稈は速やかに持ち出すことを基本とします。
- ② 麦稈をすき込む場合にはストローチョッパー等で細断してからプラウですき込みます。また、麦稈の腐熟促進のため、次の処理を行いましょう。

- ・ 麦稈全量すき込み（麦稈500～900kg/10a）：窒素3～5kg/10a添加
 - ・ 搬出残渣すき込み（麦稈300～450kg/10a）：窒素2～3kg/10a添加
- 出典：北海道緑肥作物等栽培利用指針（改訂版）

(2) 土壌物理性の改善

小麦収穫後は、土壌が乾燥しやすく土壌物理性の改善に好適な条件となるので、積極的に心土破碎や暗渠の施工を行いましょう。

(3) 緑肥作物の栽培

- ① 収穫跡地に緑肥作物を導入し、地力の向上に努めましよう。緑肥の導入効果を高めるため、小麦の収穫後速やかには種し、収量を確保ましよう。
- ② イネ科作物の作付けが多い場合には「シロカラシ」や「ひまわり」を選択ましよう。また、えん麦の場合には「えん麦野生種」を選択ましよう
- ③ 緑肥作物は野良生え防止のため、結実前に必ずすき込みましよう。

表 小麦後作緑肥の種類（例）

緑肥作物名	窒素施肥量 (kg/10a)	は種量 (kg/10a)	商品名 (例)
シロカラシ	5～8	2	キカラシ、夏カラシ
ひまわり	4～6	1.5～2	夏りん蔵
えん麦野生種	5	10～20	ハイオーツ、プラテックス

出典：北海道緑肥作物等栽培利用指針（改訂版）

暑さが続いています。こまめな休憩と水分補給を！

(4) 土壌診断の実施

pHが低下しているほ場が散見されています。また、土壌診断結果に基づいた施肥を行うことで肥料コスト低減が可能になります。収穫終了後に土壌診断を行い、次作の作付けの施肥設計に活用しましょう。

(5) やむを得ず連作する場合

- ①前作収穫前の雑草や病害の発生程度を確認して、次作の防除対策に活かしましょう。
- ②「野良生え麦」やイネ科雑草の発生を減らすため、は種前のグリホサート系除草剤処理を行いましょう（浅く耕起→雑草発生→除草剤処理→は種）。
- ③極端な早まき（9月5日頃まで）は、過繁茂や冬枯れ、眼紋病の発生を助長しますので、「適期は種」に努めましょう。

【豆類】

1 病害虫防除

(1) マメシクイガ（大豆）

生育が早まっているので、莢の伸長を確認して防除が遅れないよう注意して下さい。

※品種「ユキホマレ」：開花期 7月15日（平年 7月21日）留萌本所管内作況より

【1回目の防除】莢伸長始（およそ半数の株に長さが2～3cmに達した莢が認められる）の6日後に合成ピレスロイド系の薬剤を散布

【2回目の防除】1回目の防除の10日後に有機リン系の薬剤を散布

(2) 菌核病・灰色かび病（大豆・小豆）

過繁茂状態で風通しが悪いと発生しやすいため、ほ場を確認して適期に防除を行いましょう。耐性菌の発生が認められるため、同じ薬剤を連用しないようにして下さい。

区分	防除適期	防除間隔・回数
大豆	開花始後10～15日目	10日毎に計2～3回防除
小豆	開花始後7～10日目	10日毎に計3回防除

※ 開花始 = 開花した株が全体の5%に達した日

(3) ハダニ類

高温・乾燥状態が続くと発生が多くなります。ほ場周縁部から発生が見られることが多いので、予察を行って発生を確認したら速やかに防除して下さい。

2 除草

現時点で残っている雑草は、除草剤による処理が難しく手取りでの対応となります。雑草が大きくなると作業が大変になるだけでなく、大量の種子が落ちて次年度以降の発生源になるので、早めに抜き取りに入りましょう。

農薬散布にあたっては、「農作物病害虫防除および防除剤使用ガイド」の最新版（黄色い冊子）や農薬のラベルを参照して、適正使用に努めてください。